

(対象事業：2. 先進的な展示・教育手法の開発等の事業)

事業名：展覧会鑑賞授業教材開発

事業者名：神戸市立小磯記念美術館

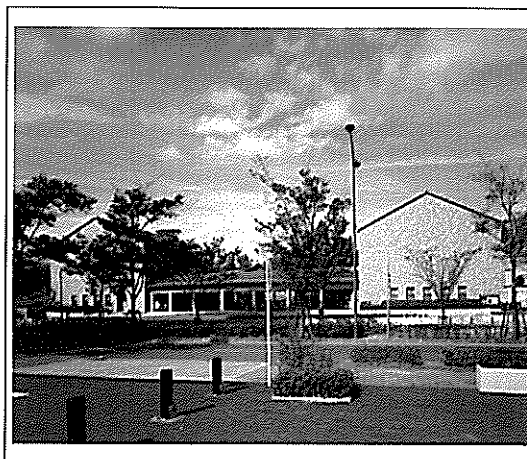
連携事業館名：なし

住所：神戸市東灘区向洋町中5丁目7

TEL：078-857-5880

FAX：078-857-3737

HPアドレス：[www.city.kobe.jp/cityoffice/57/koi-so\\_museum/](http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/koi-so_museum/)



### ①施設概要

神戸に生まれ、神戸で制作を続けた洋画家小磯良平の没後、油彩・素描・版画などの約2,000点の作品が、アトリエ・蔵書・諸資料と共に、遺族より神戸市に寄贈されたことにより、平成4年11月に、開館。

美術館は、21世紀の海上文化都市六甲アイランドの緑豊かな公園内にあり、3つの展示室のほかに、小磯良平のアトリエも移築され復元されている。

開館以降、小磯良平の偉業を顕彰し、作品の収集、保存、調査研究、普及活動を行っている。

### ②事業の意図目的

当館で開催する3つの特別展における【鑑賞学習プログラム】を教員との連携のもと、学校→美術館、美術館→学校、と学習の場の連続性を考え、また、大学とも連携して継続的に展開し、美術作品との様々な出会いを模索するなかで、当館独自の【鑑賞学習プログラム】を構築する。プログラム開発にあたっては、神戸市の小・中学校の教員、神戸大学等、様々な校種と連携して行い、学校と美術館のネットワーク拡充を図り、子どもたちが、美術館に親しみ、美術作品により一層興味を持つことができるようにする。

### ③事業概要

・他機関等と連携して教育普及手法の開発を行う事業

●3つの展覧会に通して、様々な場で、子どもに美術作品をどのように出会わせるのかを問いながら進める。

●学校との連携は、大学とは展覧会毎段階的に継続して、小・中学校とは、展示内容や学校や教員のニーズに合わせて対象を決め、共同研究を進める。

●【鑑賞学習プログラム】の充実を図るため、鑑賞ガイド教材の作成、学習の場を連動したプログラム開発、展覧会関連の鑑賞ワークショップ、教員向け研修講座等を実施する。

### ⑥事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 子どものための鑑賞ガイド：「みつかるかな?植物のひみつ」  
「絵画のきもち」

鑑賞学習教材：「小磯記念美術館のコレクション」ガイドとカード

作成した報告書等

冊子 鑑賞学習教材「小磯記念美術館のコレクション」活用のでびき

CDR 「びじゅつと話そう。」

### ⑦参加者状況

内 訳 参加者人数 延べ18,383人  
植物画世界の至宝展関連：3,578人 鴨居 玲展関連：4,267人  
コレクション大公開! Version2関連：10,538人

## (1) 事業の実施状況について

### ○「植物画世界の至宝展」に関連して

#### ア、子どものための鑑賞ガイドの作成

##### ◆「みつかるかな？植物のひみつ」

A6 版 16 頁 発行：平成 17 年 7 月 10,000 部

- ・子どもたちが、植物画を見ることを通して、植物の色、形、つくりなど、新たな気付きが生まれるよう、最小限のヒントやキーワードを紹介したもの。夏休み期間中ということもあり、来館した子どもたちがこのガイドを手にも、自ら学習できるように考えた。神戸大学発達科学部講師：勅使河原先生と共同制作。教材として 14 校 3,15 名が利用（来館した学校は除く）。

#### イ、ワークショップの実施

##### ◆美術館大作戦 2「家族でつくろう 植物のふしぎ図鑑」

7/30, 8/12, 8/13, 8/16 計 4 回実施 家族単位で募集 109 名参加

- ・子どものための鑑賞ガイド「みつかるかな？植物のひみつ」を使って、ギャラリートツアーを実施。家族で展覧会を鑑賞した後、用意しておいた植物を観察しながら、「植物画」制作に取り組んだ。完成した作品を家族ごとに図鑑にしつらえた。



ガイドを手ギャラリートツアー

##### ◆中学校美術部のためのワークショップ

5 校（7/28, 7/29, 8/4, 8/6, 8/19） 54 名参加

- ・子どものための鑑賞ガイド「みつかるかな？植物のひみつ」を使って、ギャラリートツアーを実施。ガイドを使って自ら鑑賞できるようにした。4 校は、展示室で「植物画」を模写。1 校は、大作戦と同様実際の植物を見て「植物画」制作に取り組んだ。

### ○「コレクション大公開！ Version2」に関連して

#### ア、鑑賞学習プログラム開発委員会の発足

7 月 14 日～2 月 23 日まで計 9 回実施

メンバー：計 17 名/神戸市立小・中学校教員、関西大学院生、  
兵庫教育大学教授、美術館スタッフ

- ◆鑑賞学習教材「小磯記念美術館のコレクション」の作成、編集  
小磯記念美術館の収蔵作品を用いたガイドとカードのセット。

#### □子どものための鑑賞ガイド

A6 版 16 頁 発行：平成 17 年 9 月 30,000 部

- ・「コレクション大公開！ Version2」に出展の作品を掲載し、期間中は、ギャラリーセルフガイドとして活用（10,000部）。これ以外も教材として18校4,155名が学校で利用した（来館した学校は除く）。
- ・作品についての解説はあえて避け、作品を楽しむための「キーワード」と作家のエピソードを添えた。鑑賞学習プログラム開発委員会で編集。

#### □コレクションプラスカード（子ども用）

A7版 20枚セット 発行：平成17年9月 20,000部

- ・展覧会終了後も活用できるよう、全ての収蔵作品の中から20点を選んだ。鑑賞学習プログラム開発委員会で、テーマ、作風、表現方法などを考慮し作品を検討。ガイドとともに23校4,713名が利用（来館した学校は除く）。

#### □コレクションプラスカード（先生用）

A4版 20枚セット 発行：平成17年9月 3,000部

- ・授業での話し合いの際に、提示できるよう大判を作成。裏面には、教員のために子どもたちと作品を楽しむための解説と簡単な作家略歴を添えた。解説は、鑑賞学習プログラム開発委員会で執筆、編集。来館した学校と授業に活用した42校に2部ずつ提供。

### ◆鑑賞学習プログラムの実施

A:学校の授業で活用するプログラム

B:美術館と学校、場の連動を意識したプログラム

### ◆鑑賞学習教材「小磯記念美術館のコレクション」活用の手引きの作成

A4版 32頁 発行：平成18年3月 3,000部

- ・鑑賞学習プログラム開発委員の教員が、2学期に自校で実施したプログラムをもとに、内容を調整検討し編集。学校での活用7例、学校と美術館での活用例5例、促実践に役立つ12事例を紹介。18年度以降の教材活用のためのティチャーズガイドとして学校に配布予定。

### イ、ワークショップの実施

#### ◆美術館大作戦4「コレクションはともだち」

11/23, 11/26, 12/3, 12/10 計4回実施 59名参加

- ・京都造形芸術大学 ASP 学科有志「ACOP:エーコップ」(Art Communication Project)によるワークショップ。

作品の前でギャラリートークした後、コレクションの中から自分のともだちをつくるという設定で行われた。神戸大学発達科学部の学生も参加。



エーコップによる  
ギャラリートーク

美術館から帰ってからの授業

#### ◆小学校、中学校美術部ためのワークショップ

来館：19校（小学校17校 中学校2校） 1,052名参加

小学校のうち4校は、出張授業も実施

出張授業：小学校6校16クラス（来館した4校を含む）

559名参加



- ・ギャラリートークを取り入れたワークショップを、神戸大学発達科学部と連携して実施。来館した学校は、2箇所ではギャラリートークを行った後、自由鑑賞を含め各校ほぼ2時間のプログラムを実施。ここで実施したギャラリートークを分析し、実践記録CDR「びじゅつと話そう。」に収録。出張授業は、美術館スタッフが学校に出向いて実施。うち4校は、学校と美術館の場の連動を考慮したプログラムを実施。

## ○「鴨居 玲展」に関連して

### ア、子どものための鑑賞ガイドの作成

#### ◆「絵画のきもち」

A4変形版 12頁 発行：平成18年1月 8,000部

- ・鑑賞者に、作品を見ることによって伝わってくる様々な「きもち」を考えてみることを提案するガイド。教材として14校3,15名が利用（来館した学校は除く）。神戸大学発達科学部 講師：勅使河原先生と共同制作。教材として17校3,426名が利用（来館した学校は除く）。

### イ、ワークショップの実施

#### ◆美術館大作戦5「絵画のきもち」

2/4, 2/25, 3/4 計3回実施 73名参加  
(保護者も可)

- ・神戸大学発達科学部 勅使河原教室と連携して企画、実施。鴨居玲の作品の前で、神戸大生によるギャラリートークを実施した後、コンテパステルを使い「自分のきもち」を考えながら制作。色彩やタッチによる心情表現を体験。

#### ◆小学校、中学校美術部のためのワークショップ実施 13校（小学校10校、中学校美術部3校）545名が参加。

- ・ギャラリートークを取り入れたワークショップを、神戸大学発達科学部と連携して実施。来館した学校は、2箇所ではギャラリートークを行った後、自由に鑑賞を含め各校ほぼ2時間のプログラムを実施。

#### ◆神戸大学発達科学部附属住吉小・中学校との連携プログラム実施

小学校4年3クラス100名、中学校2年3クラス123名 計223名参加

- ・小・中学校、美術館、大学の共同研究プロジェクト。

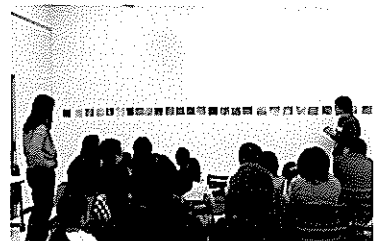
構成メンバー：計4名/中学校 図画工作・美術科教員各1名、

神戸大発達科学部教員、美術館スタッフ

- ・小・中学校ともに学校と美術館の場の連動を考慮し、事前授業、美術館来館、事後授業を実施。来年度以降、小学校から中学校へ、学びの質を検証していく予定。



鴨居さんの作品のきもち見つけた



作品に表れた「自分のきもち」

## ○全体を通して

### ア、先生のための美術館活用講座の実施

#### ◆「こんなふうに出会えるといいな 美術作品と子どもたち」

講師：京都造形芸術大学 ASP 学科 教授 福 のり子先生

2月2日（木）15：30-17：00

対象：神戸市立学校教員 参加 70 名

- ・ビジュアル・シンキングの手法を取り入れた、アメリカの実践を紹介。  
参加者にワークショップ実施。

### イ、実践記録（CDR）の作成

#### ◆「びじゅつと話そう。」

作成メンバー：神戸大学発達科学部 4年 久保俊輔

神戸大学発達科学部 講師 勅使河原君江

神戸市立小磯記念美術館 池田真規子

- ・コレクション大公開！Version2 で実施した、ギャラリートークを分析し、記録したビデオを編集。作品を見る子どもたちの思考プロセスに沿って、映像を紹介したもの。18年度以降は、教員に向けてのプレゼンテーションや自主研修の資料として活用する予定。

## （2）地域との連携について

神戸市立小・中学校、神戸大学発達科学部、京都造形芸術大学 ASP 学科、神戸大学発達科学部附属住吉小・中学校と、学習プログラムの連携を密に図ることで、対象の子どもたちに即した鑑賞学習プログラムが実施できた。

特に、来館した小学生には、大学生が直接ギャラリートークを行うなど、双方の学びが得られ、場を共有することもできた。

これらの取組は、校種の違う教員同士の交流の場を生まれることにもなり、美術館を核としたネットワークの拡充を図ることができた。

## （3）成果物について （1）に含む。

## （4）参加者の反応

今回の事業は、様々な人が絡まり合って進められた。全てを紹介できないので、以下の通り簡単に述べる。

### ア、鑑賞学習プログラム委員会のメンバー

- ・教員同士の情報交換ができ、大変勉強になった。活用の手引き執筆においては、自分の取組を振り返ることができ次年度に向けての課題を明らかにすることができた。鑑賞学習の必要性を強く感じた。

イ、 連携した大学の学生

- ・実際、子どもたちは、我々が気付かないような点まで良く見ていましたし、作品について考え、他人の意見を受けて思考を凝らし、自分の意見を皆に聞いてもらおうという姿勢が見て取れました。…今回のレクチャーを機に、子どもたちがアートに興味を持つようになり、又、先生方には鑑賞教育を取り入れるかどうか考えるきっかけになれば良いと思っています。

(京都造形芸術大学生レポート抜粋)

- ・これまでに見て学んだことや自身の経験を通して、ギャラリートークの中で私が大切だと感じる事、美術の啓蒙というよりは教育的な目線で私は考えてしまうのだが、それは「なぜ」と考えること、その姿勢を身につけることである。ギャラリートークがどれほどの意味をもつのか、どれだけの影響を参加者に与えることができるのか、私にはまだわからない。ただ、このような取り組みが一過性のものとして、特別な活動として子どもたちの中で過ぎ去っていくことは避けなければならないとはっきりと思う。

(神戸大学発達科学部学生レポート抜粋)

ウ、 ワークショップ参加者

ギャラリートークを経験して…(神戸大学発達科学部附属中学校2年)

- ・自分で言っていると考えがまとまるし、見ているだけよりも考えられる。他の人の考えがわかって楽しい。新しい発見がある。
- ・普段は家でくだらない事しか話さなかったけど、芸術対してよく話すようになった。
- ・美術館に行きたくなった(行きました!!)

エ、 先生のための美術館活用講座の参加者

- ・これまでも、年1回はトークを取り上げていましたが、もっと何回もやってみたいと思いました。トークを一参加者としてやってみて、すごく楽しかったです。作品を見る目が、トークの中で変わり、深まっていくを感じました。(小学校図画工作専科教員)
- ・私は、小学校社会科の授業研究に長年携わっていますが、社会科の授業の中でも、十分通用する考え方ではないかと直感しました。(小学校校長)
- ・あらためて、鑑賞教育の大切さを考えました。(中学校美術科教員)

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

ア、 美術館利用の増加

来館、教材の提供を含め、学校関連のみで 25,340 人(昨年度より 1 万人増)

イ、 鑑賞教育のよさを体感し、必要を感じる大人(教員、保護者)の増加

ウ、 美術館と学校(小・中・大)のネットワークの拡充

- ・小学校や中学校での実践を、大学が分析して返すシステム構築への可能性。

エ、 ビジュアル・シンキング手法導入により、鑑賞学習充実への期待を確認

- ・作品をじっくり見て、聞いて、話すことを丁寧に重ねていくことで得られる学びとその価値。
- ・図工・美術以外の学習に活用できることへの期待。